

食や農に視野を広げた国際園芸博覧会の成功に向けて

農林水産大臣

坂本哲志

さかもと てつし



GREEN×EXPO 2027は、1990年の大阪花の万博(国際花と緑の博覧会)以来37年ぶりに日本で開催される、AIPH(国際園芸家協会)が承認するA1クラス(最上位)の国際園芸博覧会である。

元来日本人は、古くは江戸時代に園芸ブームが起こり、幕末に日本を訪れた英国東インド会社のロバート・フォーチュン(通称)を驚かせたように、花と緑を好む国民性があるといわれている。大阪花の万博では、わが国に古くからある生け花や盆栽などの伝統文化をはじめ、様々な国の花壇や装花技術等の展示を通じて示された花と緑の魅力が、来場者の心を強く

捉えた。これがきっかけとなり、1990年代にはいわゆる「ガーデニングブーム」が起こり、1997年には「ガーデニング」が新語・流行語大賞に選ばれた。また、わが国の花き産出額は、バブル崩壊後の中にあつて、大阪花の万博開催前年の1989年の5026億円から、1999年には6346億円と大きく増加し、花き産業の黄金期を迎えた。このように、国際園芸博覧会は、経済的にも大きな影響力を持つ国家的な一大イベントである。

時代は変わり、今日、地球温暖化の進行や

生物多様性の減少といった世界規模での環境問題の深刻化、気候変動に伴う自然災害の激甚化・頻発化による食料問題の顕在化など、様々な社会的・経済的課題が山積している。世界は、資源浪費型の社会を改め、限りある地球環境の持続という人類共通の目的に軸移した環境社会への大きな転換の途上にある。本博覧会が開催される2027年は、SDGsの達成目標年(2030年)まで3年という年にあたり、世界中から、発展と持続性を両立する自制的な社会の実現に向け、世界はどう変わったか、また、その先はどうなるかに関心が向けられる時期となる。本博覧

会では、わが国のSDGs達成への貢献はもちろんのこと、その先の社会も見据えた日本ならではのモデルを提示し、この分野においてリーダーシップを発揮することが求められる。

NbsSを提示する博覧会へ

こうしたことから、本博覧会は、単なる花と緑の祭典にとどまらず、初めて本格的に食と農にも視野を広げ、植物や自然の力を活用し、様々な社会課題の解決案(NbsS: Nature-based Solutions)を提示する博覧会になると考えている。農林水産省は、わが国の豊かな食文化や食生活の維持・発展に向け、食料・農林水産業の生産力向上と持続性の両立をイノベーションで実現する食料システムの構築を図るための政策方針である「みどりの食料システム戦略」を策定(2022年5月)した。現在、同戦略に基づき、国内外の調達段階から生産、流通・加工、消費に至るまでの食料システム全体において、関係者の行動変容と技術革新により環境と調和のとれた持続的な食料システムの実現に取り組んでいる。

また、消費者、生産者、食品関連事業者、日本の「食」を支えるあらゆる人々と行政が一体となって、考え、議論し、行動する国民

運動として、「ニッポンフードシフト」の推進に力を入れており、経団連の会員の皆さまにも格別なお力添えをいただいているところである。

こうしたことから、豊かな食と暮らしを支える日本の農林水産業の発展はもとより、持続可能な社会の形成に向け、本博覧会が重要なイベントとなることは間違いなく、現在、政府を挙げて準備を進めているところである。

「みどりの食料システム戦略」への理解醸成

本博覧会は、日本の人口の約3割が暮らす1都3県で開催される初めての国際博覧会でもある。首都圏のみならず全国の消費者と海外からの観光客の来場が見込まれ、来場者数も1000万人以上を想定している。農林水産省としては、本博覧会を機に、日本の消費者の皆さまに、「みどりの食料システム戦略」への理解を深めてもらい、行動変容を訴えるとともに、世界に対して日本の高度な食と食文化をアピールし、国産農林水産物・食品のさらなる輸出拡大につなげたいと考えている。

経済界にとっても、環境や人々の豊かな暮らしに対する社会的責任が問われる中、本博

覧会は、わが国企業の環境への取り組み姿勢を世界に示すとともに首都圏の巨大な消費者層の支持を獲得するうえで、千載一遇の機会となる。

本博覧会は、家族参加型のイベントとして、多くの子どもの来場も見込まれる。次代のわが国を支える子どもたちに、今から行動することによって持続可能な明るい未来が実現できることを示すことは、非常に意義深いことであり、経済界の皆さまと共に取り組んでいきたいと考えている。また、海外の展示と並んで本博覧会の核となるエリアとして、主催者とテーマを共有しながら「幸せを創る明日の風景」を共創する空間である「Village」が用意されている。ここにも、経団連の皆さまの参画を期待している。

本博覧会が、より楽しく意義深いものとなり、明るい未来の道しるべとなるよう、食品産業・農林水産関連企業の皆さまの参加はもちろんのこと、食料システムを支える全ての企業がそれぞれの立場で様々な役割を担っていただくよう、お願いしたい。

(注)参考：ロバート・フォーチュン著『幕末日本探訪記―江戸と北京』